

平成30年度教育事業
自然体験活動指導者養成研修
(NEALリーダー養成)

1. ねらい

- ・ 子どもの発達段階において適切かつ安全に指導ができる自然体験活動指導者を養成する。
- ・ 野外活動の基本的なスキルを身につける。
- ・ 野外でのリスクマネジメントの基本を理解する。

2. 実施日

9月11日(火)～9月13日(木) 2泊3日

3. 対象者

大学生、青少年教育指導者

4. 参加者 / 募集定員

23名 / 20名

5. プログラム (要約)

NEALリーダーのカリキュラムにのっとり、自然体験活動の基礎基本を学ぶ18時間の講習を行った。参加者は県内の大学生を中心に、奈良県、京都府、三重県などから民間団体等の指導者が参加した。

<講習会のスケジュール>

●9月11日(火) 1日目

「開講式」
「オリエンテーション・ガイダンス」
「青少年教育における体験活動」
「対象者理解」 野口和行氏(慶應義塾大学准教授)
「自然体験活動の指導」高瀬宏樹(国立曽爾青少年自然の家)

●9月12日(水) 2日目

「自然体験活動の特質」 蓬田高正氏(天理大学講師)
「自然体験活動の技術」岡野こころ(国立曽爾青少年自然の家)

●9月13日(木) 3日目

「自然体験活動の安全管理」甲斐知彦(関西学院大学教授)
「3日間のふりかえり」
「修了試験」

9月11日(火) 1日目

所長による歓迎のあいさつで研修会がスタート。ガイダンスでは、今回の講習のねらいとNEALの指導者養成カリキュラムの解説が伝えられた。

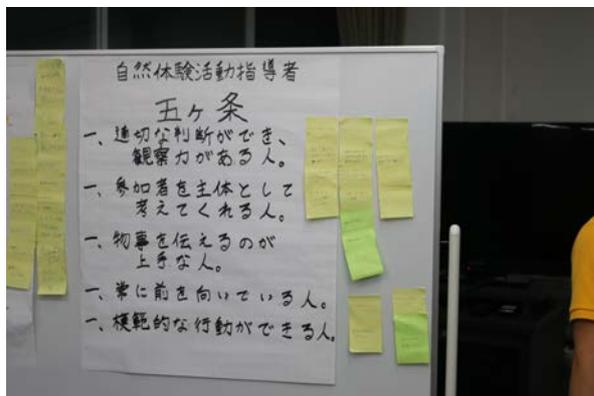
受講者どうしのよい関係づくりのため、A4用紙1枚を使って、「自分自身がはまっているもの・こと」を書いて仲間探し。共通の趣味や嗜好がある人どうしの交流はあっというまに進んだ。



野口和行氏(慶應義塾大学准教授)による「青少年教育における体験活動」では、自分自身の子供のころの体験を洗い出し、その後、現代の子供たちとの比較をし、課題について協議をした。自らの体験を振り返り、それから考えていくというやり方をとることで、身近に子供を理解することができたようである。

「対象者理解」では、野口氏が主宰する障害のある子どものキャンプの事例から、子供にどうアプローチするかを小グループでの話し合いを通して検討した。

「自然体験活動の指導」では、午後の講義をふまえ、「どんな指導者が理想の指導者か」について協議した。各グループから、協議結果が発表されると、知識や技術のほか、人間性の重要性があがり、その大切さを改めて認識したようである。



9月12日(水) 2日目

蓬田高正(天理大学講師)氏による「自然体験活動の特質」では、自然環境を教材として、どのような視点でプログラム化していくかについて、活動を通して

学んだ。色見本から同じ色を自然の中から探したり、形状を探したり、目隠しして木を探り当てたりと、五感をフルに活用した体験手法を学んだ。



「自然体験活動の技術」では、基本的なスキルとなる刃物と火を中心に取り扱い、「指導できるためにはまず自分自身が正しくできること」を目指して体験をした。ナイフをどう使えばケガがないのか、薪をどのように組めば火は起きるのか、原理原則の確認を中心に学んだ。



9月13日(木) 3日目

甲斐知彦(関西学院大学)氏による「自然体験活動の安全管理」は、動画を多く活用した講義となった。東日本大震災時のディズニーランドの対応から、どのように有事に備えておくか、またもしもの際にどのようにマネジメントするのかという、「リスクマネジメント」の考え方についてまず講義があり、その後、具体

的な対応について様々な事例をあげて研修を行った。



野外活動の場面を描いた絵から、危険な場面を見つけたり、虫刺されやけがの対応について確認するなど、あらためて安全管理が自然体験活動の土台となることを再認識する講義となった。

6. まとめ

今回、さまざまな現場を持つ講師陣に、最新の情報を得た研修となった。受講生は初心者ばかりでなく、経験のある方もいたが、「あらためて基礎基本を確認することができた」との声も聞かれた。学生だけでなく、民間の自然体験活動団体のスタッフや、地域おこしの活動をされている方など、様々なバックボーンを持った方々どうしのやりとりも講習を充実させた。今後の活動をフォローしていけるよう、自然の家でも参加者の今後を見守っていききたい。

(事業推進係長兼企画指導専門職 高瀬宏樹)